

最初の留学生しのび墓を再建

史交流蘭日るがみよ

わが国最初のオランダ留学生十五人のうち、留学先で死んだ技術職人の墓碑が、オランダ側の配慮によって今秋、現地につくられる運びになった。さらに留学生グループの世話係を務めてくれた恩人の墓も、荒れ果てたままであったことがわかり、関係者が謝恩碑建立へ動き始めている。この二つの話題、実は日本近代史「夜明け」のひとコマを検証し続ける研究者たちが地道に成果をあげつつある過程の副産物なのだ。

(藤田 真一編集委員)

オランダからの手紙

今年の五月上旬、アムステルダム市で二十年間暮らす知人・勝山光郎氏から手紙が届いた。日本料理店経営のあと、海外新聞普及及会社のベネルクス代理店を経営してきた人だ。

手紙によると、一昨年夏、幕府留学生の追跡研究にやって来た法政大学助教授(英文学)宮永孝さん(三つと知り合い、以来なにかと調査に協力するうち気がかりな事実を知った。

(1) 当市の鋳物工場と造船所で研修中、一八六五年に病死



徳川幕府オランダ留学生の大川喜太郎＝山下岩吉の孫・三崎ユキさん(香川県在住)所蔵

した、徳川幕府留学生大川喜太郎の墓をつきとめたが、墓石のかけらもない。

友好的に公有地提供

(2) オランダ政府の留学生世話係だった海軍医ボンペ・ファン・メルデルフオールト(一八一九―一九〇八)の墓所も、ベルギーのブリュッセル市内にあることをつきとめたが、やはり墓石は見当たらない。

西洋近代医学の恩人

(3) ボンペ博士は長崎で五

宮永さんによると、話を聞いたアムステルダム市当局が友好的に公有地を提供してくれ、日系企業も資金を出してくれた。碑銘は、赤松大三郎の孫である協和銀行・色部義明会長(モロ)が筆をふるい、すでに現地へ送っ

勝山両氏のコンビで見つけることができた。

宮永さんのボンペ研究は一昨年ふとした偶然でオランダ・ラデン市に住む日本学研究者、A・スハウテン氏に出会ってから急速に進んだ。本職の国立熱

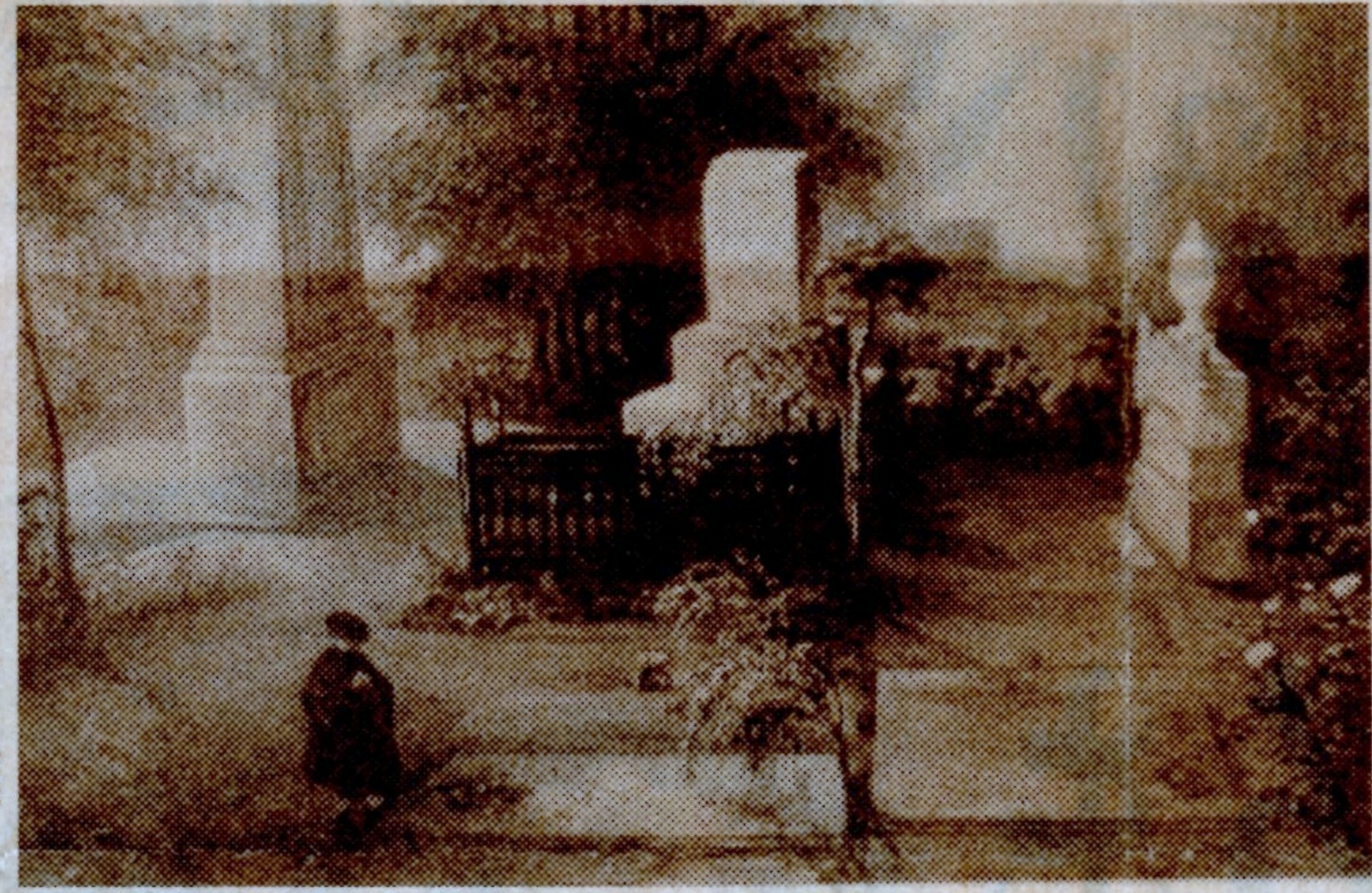
世話役への謝恩碑も

研究者の熱意が推進力

年間日本人に近代医学と診療の実際を教えて帰国後、留学生の世話までみてくれた人です。経済摩擦で欧州人の対日感情が厳しくなってきた時期でもありま

た。十月初旬、除幕式をあげる予定。

大川は江戸っ子だが、いまだに子孫がわからない。異国での心労をまきらわす酒のせいとか、アルコール性肝炎で急死した。留学仲間が立派な墓をつくり、当時、それを珍しがってオランダ画家が描いた絵も宮永



オランダの画家J・W・フアヒウスが一八六七年に描いた大川喜太郎の墓、日本式墓石で一九五六年までこのまま実在していた(絵は、アムステルダム歴史博物館絵画保存所・所蔵)

日蘭学会(東京港区南青山四ノ一七ノ三五、電話〇三二四〇二二二)九二が、連絡窓口を引き受けて

帯研究所長を辞め、二十年間近いボンペ研究に今なお情熱をもち続けている人だ。

「日本人のボンペ研究はほとんど読んだが、原史料に当たらない、受け売りの記述が多くみられる」と忠告されたため、関係各地を徹底的に調べ歩き、うまく理解できなかった」

田次郎・荒瀬進・共訳『ボンペ日本滞在見聞記』から。

宮永さんの呼びかけにこたえて、同大学と、日蘭(らん)交流史の研究者たちが、ボンペ謝恩碑の建立について協力を約束してくれた。八月上旬、宮永さんは現地へ行き、関係者と話し